平成 26 年度第 4 回小学校ゼミナール記録

2014 年 7 月 11 日（金）

於：広島大学附属小学校

司会：影山和也（広島大学准教授）

参加者：大滝（発表者）他 12 名

1. 検討論文

Heyd-Metzuyanim, E. (2013). The co-construction of ‘learning difficulties’ in Mathematics: Teacher-student interactions and their role in the development of a ‘disabled’ mathematical identity. *Educational Studies in Mathematics*, *82*(1), 341-368.

数学における学習困難の共同構成：教師と生徒の相互作用と「障害的な」数学的アイデンティティの発達におけるその役割

2. ゼミナールの内容

今回は 3.3 節から論文の最後の節となる 4.2 節まで読み進んだ。アイデンティティ形成プロセスの事例を提示する第 3 節の最終項である 3.3 節では，Dana の自己評価が教師の評価へと収束したことが例示された。そして 4 節では Dana が失敗を繰り返していた理由を数学的相互作用の結果であるとし，4.1 節では，教師と生徒の相互作用が学習障害の一因となっている可能性があることを述べ，4.2 節で今回の分析方法の利点と欠点を述べしめくくっている。

ゼミナールの後半は, 本研究の価値に関する議論になった。本論文の主張は簡単に述べれば, 教師の生徒に対する情意評価が生徒の学力を形成し，そのプロセスはコントロールが非常に難しいということである。指導改善への示唆は基本的にはみられない。本研究への疑義として，このことは経験的に自明であるため，あえて研究する必要があるのか，ということがあげられた。また，本研究を擁護する意見としては，経験によらない教授学的知識の構成による情報の共有可能性や，将来のカリキュラムや授業のよりよい設計に繋げるための教授学的現象の正確な把握の重要性があげられた。

3. 補足情報

著者の Einat Heyd-Metzuyanim（何と発音すればよいのだろう？）はイスラエルの女性研究者で，本論文と深く関連するテーマで 2012 年に Ph.D.をとったようです。指導教員は Anna Sfard です。Sfard の最近の著作を読めば, コモグニション論のこれからの課題が identity や identification に関わるものであること，そして Sfard が Heyd-Metzuyanim の研究を高く評価しているということがわかります。こうした事実を総合すると，本論文は Sfard の懐刀によるコモグニション論の最先端ということができるでしょう。今年カナダのブリティッシュコロンビア大学で行われた PME38&PME-NA36 でも Heyd-Metzuyanim は SO をしていましたが, そこでは identity の問題ではなく, ディスコースの量的な特徴づけによる研究の客観性の向上に取り組んでいました。ちなみに英語ネイティブらしい座長も Heyd-Metzuyanim の発音をあきらめ，彼女をファースト・ネームで呼んでいました。

（文責：入江讃良・大滝孝治）